

研修生レポート

稀人来たりて、二度橋を架ける –川俣正「仙台インプログレス」をめぐる〈歓待〉–
万里（Maden）（RAM2研修生 / テレビ番組ディレクター / 写真家）

[仙台市新浜地区、貞山運河の畔、地元住民の語り]

「津波で流されたあの橋が出来る前のこと、私がこの腰ほど小さかった頃のこと。この運河の向こうに広がる浜や松林に行くには船で渡るしかなかった。ある日、その松林に宿を建てたいという者が他所からやってきた。宿といってもいわゆるモーターだ。その者はモーターに来る客のために橋を掛けてほしいと役場に談判した。しかし到底叶わず、自分の金で作ることにした。店開きの日、辺りの者が皆招かれ歓待された。幼かった私は手を引かれ、運河を橋で渡った。大人たちは飲めや謡えの大騒ぎ、子供は腹いっぱいご馳走を頬張った。」

2018年夏、geidaiRAM2の第一回フィールドサーヴェイが仙台で行われた。フィールドサーヴェイとは、芸術的な実践のための実地調査とドキュメント制作を実践的に取り組むプログラムである。

初日は現代美術家・川俣正のアートプロジェクトの現場と被災地のフィールドワーク。二日目はせんだいメディアテーク見学、そしてメディアテークとgeidaiRAM2共同企画のオープンレクチャー「仙台アートノードミーティング vol.5」参加。そして最終日は仙台を拠点に土地と協働しながら記録を残す活動をしているNOOKとRAM2のトークセッションである。

2018年8月4日、仙台市中心部から浜側におよそ10キロ。東日本大震災で58人が犠牲になり、150世帯居た住民がおよそ半分になった新浜地区で、川俣によるサイトスペシフィック・ワーク「仙台インプログレス」は新たなステージを迎えていた。

メディアテークと住民、そして川俣の協働が進められているこのプロジェクト。現地でのヒアリングやワークショップを通じて、「生活に欠かせない橋が津波で流され困っている。橋がほしい。」との声を聞いた川俣は、記憶と生活を結びつけてきた橋を復活して、人々をつなぐ物語を紡ぎたいと提案する。「みんなの橋プロジェクト」である。

橋の再建には行政との折衝など時間がかかる。まずは橋を架けようとしている貞山運河を渡す「みんなの船」をつくり進水式を執り行う。そして、船で向こう岸に渡り、地区の歴史について語りながら歩くワークショップを行うことにした。

[貞山運河の畔、桂英史（geidaiRAM2事業プロデューサー・東京藝術大学大学院映像研究科教授）の語り]

「この仙台インプログレスは、川俣さんがこれまで手がけたモチーフが散りばめられようとしている。橋、船、木道、フットパス、様々なアクティビティ。これは川俣さんのベストアルバムとでも言うべき作品になるのかもしれない。」

「みんなの船」の進水式。くす玉が割られ、塩と酒で浄められ、安全が祈願される。

岸から川面に曳かれた船は発泡プラスチックの断熱材で形作られている。船底は浅く、黒く塗られている。形はかつてこの運河を行き来していた馬船を、色は異人を乗せ日本に到来した黒船を模したという。

兩岸を渡した綱で導かれ船は進む。船に乗るという行為は、多様な視点を記憶と結びつけながら想起することを促す。

船を待つ、見送られる、旅立つ、移ろう、他所に降り立つ、歓待される。

幅20メートルの運河に浮かぶ、長さ6メートルの船による短い航海と視線の移動。この日参加したおよそ60人全員がこの行為を共有することとなる。

ワークショップの後には、建築家の伊東豊雄の手による地区の集会所「みんなの家」に参加者が集まり、トークセッションが行われた。このトークセッションの最後に、翌日せんだいメディアテークで行われるオープンレクチャーのテーマを〈歓待〉にすると桂が明かした。

[新浜地区「みんなの家」、川俣正の語り]

「私は『笑っていいとも』のタモリになればいいと思うんですよ。彼自身は、けしてたいして面白い話をするわけではないけど、多様な才能を持った人が他所から次々と集まってくる。ここがそんな場になればいいと思ってるんですよ。」

8月5日、せんだいメディアテークのオープンスクエア。壇に登ったのは、川俣正、桂英史、台湾の国立台南藝術大学准教授の龔卓軍（ゴン・ジョジュン）、そしてせんだいメディアテークのアーティストック・ディレクター甲斐賢治である。

冒頭で、桂が今回のトークのテーマになぜ〈歓待〉を選んだかについて語り始める。このプロジェクトは〈歓待〉を考える契機にとってもふさわしい。他所から来る稀人としてのアーティストは、〈歓待〉について考えるきっかけを観衆に与える。アートは他者性を受け入れる練習問題になるのだと。

甲斐は〈歓待〉において重要な態度が、せんだいメディアテークの準備段階で策定された三つの「憲法」に埋め込まれていることに言及する。それは1999年に桂が中心となって編んだものである。

[せんだいメディアテーク準備室による、せんだいメディアテーク憲章]

- 1) 最先端の精神（サービス）を提供。
- 2) 端末（ターミナル）ではなく節点（ノード）である。
- 3) あらゆる障害（バリア）から自由である。

話題は他所者としてのアーティストという存在の要件につながっていく。

桂は、アーティストは鑑賞者を超越的に振り回す人である。そして何よりも必要なのは、説明すら拒否する神がかった跳躍力だと言う。

川俣はアーティストに必要な才として、包容力と直感力を挙げる。

龔（ゴン）は二つの定義を上げる。まずは社会と対照し得ない存在としての超越性である。今回の仙台訪問では、まるで神を〈歓待〉するかのようにアーティストが船で到着するのを待つ光

景が象徴的だったという。続いて、龔（ゴン）の専門領域であるフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスからの視座である。人はいかにして己を出でて他者に出逢うことができるのか。それを突き詰める存在として他者を必要とする。他者＝現実の影から出てきた人であり、他者を神と読み解くことも出来るがアーティストと読み替えることも出来ると。今回の〈歓待〉というテーマはレヴィナス的他者について、突き詰めて思考するのにとても適切な機会でもあるという。

そして、現場に他所者として立つアーティストの姿勢について対話は伸びる。

川俣はリサーチに臨むアーティストの姿勢について語る。リサーチは徹底的にする。それは撃ち殺されないために。ただしリサーチした後はすべてを忘れること、リサーチを信じてはいけない、現場に降り立った時の第一印象や皮膚感覚を信じるのだ、そして最後は「高を括る」のだと。

龔（ゴン）は、アーティストの姿勢として、プロジェクトに弱さを保つことの重要性を語る。弱さは良きもの。それはお互い何かを贈与し合う可能性、余地を残すからだ。チェーンリアクションを起こし、共犯関係を築くために大切なものなのだという。

最後に、今回のプロジェクトが重要な役割を託した「橋」と「船」が何を表象するかについて、川俣への問いが付される。

川俣は、船に纏わる多様な比喩について語る。待つ、移ろう、着くという経験は、視点や人称の切り替えを自然に促す。橋を渡るという行為は、トンネルをくぐることに近いと感じているが、今回、船を作って向こう岸に渡ったからこそ見えること、象徴的に分かることがある。今回の実感を受けて、どんな橋を架けるのかについて、もう一度考えたいと述べた。

[『歓待について』より、ジャック・デリダ]

「到来者にはウィ（oui）と言おうではありませんか、あらゆる限定以前に、あらゆる先取り以前に、あらゆる同定（アイデンティフィケーション）以前に。到来者が異邦人であろうとなかろうと、移民、招待客、不意の訪問者などであろうとなかろうと、他国の市民であろうとなかろうと、人間、動物あるいは神的存在であろうとなかろうと、生者であろうと死者であろうと、男であろうと女であろうと、ウィと言おうではありませんか。」（ジャック・デリダ [著] 廣瀬浩司

[訳] 『歓待について パリ講義の記録』筑摩書房、ちくま学芸文庫、2018)

到来者がもたらした新浜の橋。

モーターはその後つぶれた。

他所者が去った後もそれは残った。

建設からおよそ半世紀、津波で流された。

今、川俣正という異邦人が、再び橋を架けようとしている。